アニマルマスター番外編―グルドとクレスのお留守番―

相川 凛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アニマルマスター番外編―グルドとクレスのお留守番―

【Ｎコード】
Ｎ９１５４Ｏ

【作者名】
相川　凛

【あらすじ】
オリジナル長編小説「アニマル・マスター」ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ０１４０ｈ／の番外編です。
本編を知らない方にはちょと意味がわからないと思います。
何も知らずに読もうと思われた方がいたらすみません！

グルドは腕の中に丸くなったクレスを抱え、白い壁に掛けられた銀色のフレームの丸時計を見上げた。時計の針は彼の焦る気持ちを嘲笑うかのように、淡々と時間を刻んでいく。
「どうしよう」
もう何度呟いたか分からない言葉が、また無意識に漏れる。
「クレスは俺が預かると言っているだろう！」
「お前なんかに預けられっかよ！　どーせ、実験動物を捌
さば
く研究者みてーな目で見るんだろ」
「実験動物を捌くだと？　人聞きの悪いことを言うな。俺はただ絶滅したはずのトカゲの生態を観察したいだけだ。傷つけるような真似はしない。お前こそ不純な動機で預かりたいと言ってるだけだろうが！」
「ふ、不純な動機！？　そんなもんねーよ。俺はただ友達としてリリスが帰ってくるまで預かってやろうと思っただけで……。そう、友達として！」
グルドの耳には先ほどからずっと、終わりの見えそうに無い不毛な言い争いの声が聞こえていた。
もう、いい加減にしてくれ。僕は君たちと違って暇じゃないんだ。
そう叫び出したい衝動に駆られるが、彼にはそんな勇気は無い。
いっその事、クレスを二人の真ん中に置いて自習室を出て行ってしまおうか、と考えてはみたものの、それも置き去りにされたクレスの事を思うと、とても実行できそうになかった。
「早くしないと定期便が出てしまう。乗り遅れたら……」
グルドの脳裏に、ガラス製の金魚鉢の中で腹を見せて浮かぶ、小さな赤いフナ型の金魚の姿が浮かんだ。
こんな事でグダグダ悩んでいちゃダメだ！　マリアの命がかかっ

ているんだ！
彼は意を決して振り返えると、簡素な木製の長机を挟んで向かいあって喧嘩を続ける二人の少年を見据えた。

「ごめん。クレスを預かっててもらえるかな？」
そうリリスに頼まれたのは、昨日の午後三時をちょっとすぎたぐらいの時刻だった。
特に用事も無く、授業も休講で暇を持て余していたグルドは、いつものように快くクレスのお守を引き受けた。
ただ、いつも預かっていたのは名前の無い卵で、トカゲになったクレスを預かることは初めてだった。
爬虫類の生態などはほとんど分らないけれど、二、三時間預かるぐらいなら大丈夫だろう。勝手にどこかへ行ってしまわないかと、変な物を食べたりしないかに注意して一緒にいればいいだけだ。
「いいよ。どうせ暇だったし」
グルドは笑顔でリリスの腕から、子犬ぐらいの大きさの黒いトカゲを受け取った。

だが、リリスは夕食の時刻になっても、厨房やフロアのバイトが料理を片づけ始めても、戻っては来なかった。
何かあったんだろうか？　でも、警備の厳しさでは世界一と言われている図書館で、危険な目に会う可能性は低いと思うんだけど。
それよりも問題はクレスの食事だ。リリスからは何も聞いていない。
何を食べるのかもわからなければ、一日に何回食事を与えればいいのかもわからない。
とりあえず、アール先生のところへ行き、クレスの食事について聞いた後、食堂に戻って鳥肉と鳥レバーを茹でたもの（シェフに頼んで茹でて貰った）を与えた。

クレスはどうやら肉食らしい。普通のトカゲよりも胴が短くボテッとした体形で動きも鈍そうなクレスが、どうやって獲物を捕るのかは謎だが。

だから、絶滅してしまったのかもしれない。

この島にはクレスメントオオトカゲにも捕食されるような鈍い小動物が生息していて、その小動物が何かの理由で激減するか絶滅するかして餌が無くなってしまった、とか。

グルドはクレスメントオオトカゲが絶滅した理由に思いを馳せながら、クレスが鳥肉とレバーを美味しそうに食べる姿をぼんやりと眺めていた。

食堂は夕食時ほどではないが、飲み物を片手に談笑する生徒で賑わっていた。

そろそろリリスが帰ってくるかもしれない。

グルドは食事を終えて満足そうに彼の膝の上でのびているクレスの背を撫でながら、入口の大扉を見つめた。

開け放たれた木製の両開きの扉をくぐって、私服に身を包んだ生徒達が出入りしている。けれども、その中にリリスの姿を見つけることはできなかった。

そのうちに、入ってくる生徒よりも出て行く生徒の方が多くなったことに気付いたグルドは、ふと食堂の時計を確認してみた。

時計の針は九時をすっかりまわっていた。

さすがに遅すぎる。

図書館には確か閉館時間があったはずだ。

それに、エレザと一緒に図書館に行ったとばかり思っていたが、当のエレザが夕食の時に食堂でリリスを探していた事を思い出した。

本格的に心配になってきたグルドは、熟睡しているクレスを抱き上げて、本館の図書館行きゲートへと向かった。

図書館行きゲートには先客が居た。
受付のお姉さんがテキパキと帰り支度を始めているカウンターの向かいの長椅子に、一人の男子生徒が腰掛けていたのだ。
その光景を目にしたグルドは、思わず開けた扉をそっと閉めてしまった。
長椅子に座っていた生徒が、グルドが苦手とするタイプの人間に見えたからだ。浅黒い肌に背中まで伸びたドレッドヘアの黒髪を無造作に一つに束ね、だらしなく長椅子の背に両腕を預けている姿は、学生というよりも何かの組織の下っ端にしか見えない。
しかし、彼は自分と同じクレスメント学園の制服を着ていた。
同じ学生なんだから、いきなり氷の矢で射られたり、魔法弾を打ち込まれたりはしないはずだ。図書館から派遣されている受付のお姉さんも、彼を気にせずに仕事をしているんだし。
グルドは気を取り直すと、もう一度扉を静かに開いた。
ドレッドの生徒は、ちらりと灰色の瞳をグルドに向けただけで、特に興味を示した素振りも見せずに、すぐに図書館行の魔法陣がある扉の方へと向き直った。

グルドはほっと息をつくと、受付のお姉さんに声をかけた。
「あのぉ、こちらにリリスという生徒が来ていると思うんですけど……」
「リリス！？　あんた、リリスの知り合いか？」
受付のお姉さんが答えるよりも早く、ドレッドの生徒が声を上げて長椅子から立ち上がった。
「そ、そうですけど。あの……」
グルドは飛び上がりかけて、カウンターにしがみつきながら振り返った。
「リリスなら、うちの主、じゃねぇ……ダチと一緒に図書館に居るはずだぜ。まぁ、座んなよ」
ドレッドの生徒はグルドが脅えきった瞳で見返すのも気にせずに、

肩に手を回すと長椅子まで連れて行った。そして、グルドを半ば強引に長椅子に座らせると、自分も隣に腰かけて、床に置かれたスチール缶を手に取った。
「これ、あんたにやるよ」
「い、いえ。僕はまだ学生なので、お酒はちょっと……」
グルドは差し出されたスチール缶の前で、慌てて頭を横に振る。
何故かドレッドの生徒が、少し傷ついたような表情を見せた。
「ココアだよ、これ。つーか、学園の売店に酒なんか売ってねーし、俺も学生なんだけど」
「え？　す、すみません！　頂きます！　あっ！」
グルドは勢いよく謝りながらココアの缶を受け取ろうとした。が、程よく冷えたスチール缶は、震えるグルドの指先に当たって滑り落ち、大理石のタイルに当たって鈍い音を立てた。
「あ、あぁ……」
グルドは床に落ちたスチール缶を拾おうとして、今度はクレスを膝から滑り落としそうになって軽いパニックを起こしていた。おろおろとスチール缶とクレスを見比べて動けずにいる。
「はぁ……。その、敬語も止めてくんねーかな？　なんか脅してるみてーだから。そんなに柄悪そうに見えるかなぁ」
見かねたドレッドの生徒が、スチール缶を拾い上げてグルドに手渡しながら寂しそうに呟いた。

図書館の閉館時間になって受付のお姉さんが帰ってしまった後、ドレッドの生徒―（クロードという名前だった）と意気投合したグルドは、図書館行きゲートの受付兼待合室で徹夜する羽目になった。
本当は帰ってベッドで眠りたかったのだが、クロードが放してくれなかったのだ。だが、帰れなかった理由は、それだけではなかった。
狭い室内には明かり取り用の窓も無く、日中でも照明が点いているので、時間の感覚が麻痺してしまう。時計を確認しなければ、今

が朝なのか夜なのかさえもわからない。
そのせいもあって、会話に夢中になっているうちに気付けば朝になっていた。
そして、図書館へ行った二人を待つメンバーも、いつの間にか一人増えることとなった。
国際魔法取締局の職員のフェランドだ。
グルドとクロードに朝の訪れを教えてくれたのも彼だった。
徹夜で朝を迎えた二人よりも疲労の色が濃いフェランドに、長椅子を譲り渡したグルドとクロードは、奥の魔法陣があるゲート内で、リリスとヴァレリーの帰りを待つことにした。
いくら気が合ったと言っても、一晩中一緒に居れば話題も尽きてしまう。徐々に強くなってきた眠気も重なって、二人は部屋の片隅に座って壁に寄り掛かり寝息を立てていた。

リリスとヴァレリーが帰って来たのは、そんな時だった。
強い光が、夢の世界を漂っていたグルドの意識を呼び覚ました。
まだ霞がかかったように、ぼんやりとした頭で室内を見回すと、彼の隣でクロードがのろのろと身を起こすのが目に入った。
グルドも彼に習って、クレスを抱き上げると、壁に手をつきながら立ち上がった。
眩しいぐらいに強かった青い光は、輝きを失って消えていき、魔法陣の中心に二人の生徒が立っているのがぼんやりと見えてくる。
「ヴァレリー！」
「リリス！」
その姿を目にした瞬間に、グルドとクロードはほぼ同時に叫んでいた。
二人は突然目の前に現れて（瞬間移動なんだから当たり前だが）、また風のように去っていった。
グルドとクレスの一人と一匹だけを残して。

殿下とか、王女が殺されたとか、言っていた気がするけれど、あれは気のせいだろうか。
グルドはしばらく呆然と皆が出ていった扉を見つめていたが、疲れているせいで幻聴を聞いたのだろう、との結論に達して自室へ戻って寝ることにした。

やっぱり疲れているんだ。
いや、もしかしたら悪い夢を見ているのかもしれない。
幻聴の次は幻覚が見えるんだから。
グルドはベッドに潜り込んで眠る代わりに、ガラス製の金魚鉢を両手で抱えて、クレスが入った布製のトートバッグを肩にかけ廊下を走り抜けていた。
かなりのスピードで、器用に生徒をすり抜けながら走っているのに、金魚鉢の中の水はほとんどこぼれていない。
金魚鉢の中には一匹の小さな赤い金魚が揺れている。
グルドの使い魔のマリアだ。
が、金魚鉢の中のマリアは、全身の鱗が逆立って痛々しい姿に変わり果てていた。
ああ、夢だったらいいのに。よりによって、松かさ病だなんて！
松かさ病は体が膨れて全身の鱗が逆立つ、観賞魚によくみられる病気だ。放置しておけば最終的には死に至る病だった。
薬で治療することもできるが、生存率は高いとはいえない。まして、グルドは素人で、金魚のマリアは彼の親指ぐらいの大きさしかない幼魚だ。薬で完治する可能性は絶望的だった。
慌ててアール先生のところへ連れて行ったものの、分かった事はこの学園には治療できる魔法医がいないという事だけだった。
魔法医は普通の医者と違って、魔力を使って人や動物の細胞に影響を与え、怪我や病気を治癒する医者だ。破損した箇所の細胞分裂

を早めて傷を塞いだり、特定の細胞や細菌だけを破壊して病気を治療することができる。
魔法医は人間を診る医者だけではなく、動物を診る獣医の中にも存在する。クレスメント学園にも二名の動物専門の魔法医が交代で勤務していた。
だが、魔法で治療するといっても、人や動物の体の構造や病気の知識に精通していなければ治療はできない。
魔法医はメスや薬剤を使う代りに自らの魔力を使うだけだ。病気の原因がわからなければ治療のしようもないし、体の構造を知らなければ怪我を治すどころか、逆に悪化させてしまいかねない。
そして、この学園に勤務する二人の獣医は哺乳類と鳥類を専門としていて、魚類など扱ったことすらなかった。

マリアを助けるためには、クレスメント島の南側に位置する港町キレニアの獣医に治療して貰うしかない。キレニアには、養殖魚の治療を専門としていて、副業で観賞魚も診ている獣医がいるという。
そこで、アール先生がキレニアの魚類専門の獣医と連絡を取り、国際魔法取締局の職員と交渉して条件付きでグルドとマリアの外出の許可を取り付けてくれた。
その条件とは、食品や生活必需品等を届けにくる業者の定期便に乗ること、キレニアに滞在中は国際魔法取締局の職員と行動を共にすること、その日のうちに学園に戻ってくることの三点だった。
いつもなら講師の許可さえ取れば、騎獣を使って時間に縛られずに外出できるのだが、今は緊急時ということで、国際魔法取締局の指示に従わなければならなかった。

業者の定期便は一日に二便。午前八時と午後の四時だった。
午前の便を逃せば、明日の朝まで待たなくてはならない。
あと三十分しかない。定期便が来る前にクレスを預かってくれる人を探さなければ。

グルドは友達の姿を探して土の館の中を駆け回っていた。
後になって思えば、アール先生にクレスを預ければよかったのだが、この時は気持ちばかりが焦って冷静に考えることができなかったのだ。
休講中ということもあって、まだ朝食の匂いが漂っている食堂を覗いてみたが、グルドが親しくしている生徒の姿はなかった。
すれ違っていく私服姿の生徒達の顔をチェックしながら、自習室の扉の前まで走り抜ける。

自習室の扉を開けると、見慣れた後ろ姿がグルドの目に飛び込んできた。
「ジャン！　リュカ！」
彼は歓喜の声を上げて、黒髪と赤毛の生徒が向かいあって座っている席に駆け寄った。
「グルド？　どうしたんだ？」
「おぉ？　朝っぱらから元気だなぁ、お前」
二人の生徒は、息を切らして迫ってくるグルドの姿に目を丸くした。
「あ、あの、マリアが病気になって、リリスからクレスを預かって、そ、それで、あと三十分しかないんだ！」
グルドはマリアが泳ぐ金魚鉢を机の上に置き、クレスをトートバッグの中から出してやりながら、二人に向かって状況を説明しようとした。が、気持ちばかりが焦って上手く言葉にならない。
話しかけられた二人の生徒の方は、お互いに顔を見合わせた。ジャンが「何が言いたいのかわかったか？」と小首を傾げると、リュカがふるふると首を横に振る。
「時間が無いのはわかった。だから、落ち着いてもう一度説明してくれないか？」
ジャンがグルドに向き直って訊いた。

「ごめん、えっと……。リリスからクレスを預かって欲しいって頼まれて、それで、あの……今まで預かっていたんだ」
「リリスから！？　じゃ、あいつが今どこにいるか知ってんのか？」
息を整えて話始めたグルドの言葉を聞いて、リュカが身を乗り出した。
「う、うん。国際魔法取締局の人に連れていかれたよ」
「国際魔法取締局に連れてかれたぁ！？　なんでっ？」
「し、知らないよぉ。僕はクレスと一緒にリリスの帰りを待ってただけなんだから」
「帰りを待ってたって……。あいつ今までどこにっ、んぐっ」
さらにグルドに向かって詰め寄ろうとしたリュカの服の襟首をジャンが強く引いて止めた。
「待て、グルドは時間がないと言っていただろう、後にしろ。で？　リリスからクレスを預かっているんだったな。それが、どうしたんだ？」
「うん、リリスから預かってるんだけど、マリアが命に関わる病気にかかっちゃって……。キレニアまで医者に診せに行きたいから、かわりに預かってくれる人を探してるんだ」
げほげほと咳き込むリュカを気にしながらも、グルドは説明を続けた。
あの様子だと、かなりの力で気道を絞められたんじゃないかと思う。
「……な、んだ。んなことなら、俺が、預かって、やるよ……」
やっと咳が収まったリュカがジャンを睨みながら、言葉を絞り出すようにして言った。
「ありがとう！　助かったよ！　クレス、最後まで預かってあげられなくてごめんね」
よかった。これで、定期便に間に合いそうだ。
そう安心したのも束の間だった。

「キュゥ〜ン」
話かけられたクレスが、グルドを見上げながら寂しそうな声で鳴いた。
それが、ジャンの心を鷲掴みにしたらしい。
「いや、クレスは俺が預かるよ……」
ジャンが呆然とした表情でクレスを見つめながら呟いた。
「は？　俺が預かるって言ったよな？」
「今の鳴き声を聞かなかったのか？　爬虫類があんな声で鳴くなんて聞いたことが無い。これは調べてみる価値があるだろう」
「調べるって、何を？　危ねー奴だな。お前なんかに預けらんねーよ！　クレスは俺が守る！」
「トカゲなんか守ってる暇があるなら、リリスでも探しに行け。本当に守りたいのはそっちだろう！」
「な、何言って！　お前こそ、調べてみる価値があるとかなんとかは、言い訳なんじゃねーの？　本当はクレスの可愛さにやられただけだろ」
「なんだと！　お前と一緒にするな！　そんなくだらない理由じゃない！」
「くだらない理由だぁ！？」
二人の少年は、今にも掴み掛かりそうな勢いで怒鳴りあい始めてしまった。

また始まった……。本当に、この二人は仲がいいんだか、悪いんだか分からない。
「あ、あの、時間が……」
グルドは、ついに立ち上がってジャンの胸ぐらを掴んだリュカと、それを冷ややかな目で見返すジャンの二人に恐る恐る声をかけた。
「くだらない理由だろう。リリスの気を引きたいからクレスを預かりたいんじゃないのか？」

「だ、誰が！？　かんけーねーよ、リリスは！　なんで俺があいつの気を引きたがるんだよ！」
グルドの声は全く二人の耳には入っていないようだった。
どんどん口論はエスカレートしていく。そして、時間も無情に過ぎていった。
「どうしよう」と呟いて、口論を続ける二人と壁にかけられた時計を交互に見比べているうちに、十分が過ぎてしまっていた。腕の中ではクレスが寝息を立て始めている。
彼は意を決して振り返えると、簡素な木製の長机を挟んで向かいあって喧嘩を続ける二人の少年を見据えた。

二人を一喝しようとして口を開いた次の瞬間、
「あれぇ～、グルド？　どうしたの？　またジャンとリュカが喧嘩でもしてるのぉ？」
グルドの背後からのんびりとした声が聞こえた。
今のグルドには、頼りない少女の声が天使の声のように聞こえた。
「エレザ！　ありがとう！　ありがとう！」
グルドは弾かれたように振り返り、そこに立っているのがエレザだと確認すると、彼女の前にクレスを差し出しながら、感謝の言葉を繰り返した。
「え？　なぁに？」
エレザは当惑しながらも、差し出されたクレスを受け取る。
「ごめん、クレスをちょっと預かってて。お願い！」
グルドはエレザの返事を待たずに金魚鉢を抱えて自習室を飛び出した。
まだ飽きずに喧嘩を続けるジャンとリュカの声は廊下にまで響き渡り、自習室の前を歩く生徒の足を止めていた。
グルドは人垣ができ始めた廊下を、金魚鉢を抱えて縫うように生徒を避けながら走り抜けていった。
あっという間に去っていったグルドの後ろ姿を見送ったエレザは、

「ジャンとリュカは、なんか取り込み中みたいだしぃ、部屋でリリスでも待ってようか」
腕の中のクレスに話しかけながら自習室を後にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9154o/

アニマルマスター番外編―グルドとクレスのお留守番―

2010年11月14日16時55分発行